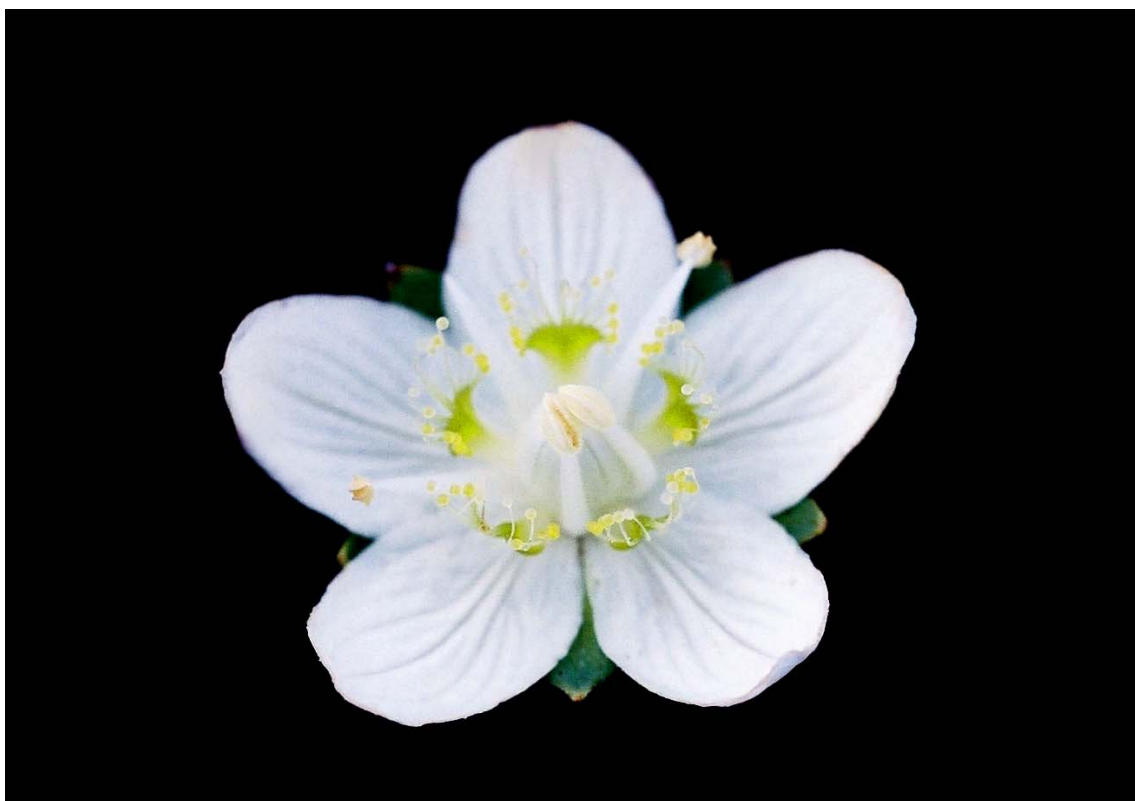


14) ウメバチソウ＝梅鉢草

真夏の野山はミドリ一色に染められるが、緑の中を丹念に探索してみると、美しい可憐な花を咲かせる植物が意外と多い。このウメバチソウもその一つで、比較的湿り気が多い陽当たりの良い草原地帯に生える。ユキノシタ科の多年草で、日本各地に分布し、草丈は 10~45cm、根茎は短くて太い。長い柄を持つ根生葉はハート型もしくは円形で、茎から出る茎生葉には葉柄はなく卵形である。夏から秋にかけて花径 2~3cm ほどの白色の花を茎頂に 1 輪ずつ咲かせる。和名の由来は花の形が菅原道真が用いた『梅鉢紋』に似ているためで、別称としてはバイカソウ、シモフリクサ、シュクハイソウなどがある。学名は『*Parnassia palustris*』で、属名はギリシャのパルナッソス山に由来し、種小辞は「沼地生の」と言う意味である。このためイギリスでの呼称も『grass-of-Parnassus』である。

みちのくの自然を愛し、野草を愛し、花巻の風土をこよなく愛した宮沢賢治は、この花にも並々ならぬ愛情を注ぎ、『鹿踊りのはじまり』という童話の中で、東北訛りを交えて語っているのだが、そのあらましを記すと以下のとおりである。“主人公の嘉十(カジュウ)は、栗の木から落ちて少し膝を痛めたため、山間の温泉につかって治療をしようと思って山道をゆっくりと登ってゆく。するとススキの原にスックと伸びた大きなハンの木があったので、腹ごしらえをしようと思い荷物を芝原に下ろすと、持参した栃と栗とのだんごを出して喰べはじめた。ところがだんだんお腹がいっぱいになったので、残りを「こいづば鹿さ呉(ク)れでやべか。それ、鹿、来て喰(ケ)」と嘉十はひとりごとのように言って、それをうめばちそうの白い花の下に置いた。そして荷物を背負って歩き始めると、手拭を忘れてきたことに気づいて、先ほどのハンの木の下まで戻ってくると、鹿の気配がする。そっと近づいてみると、そこには5~6匹の鹿が湿っぽいはなづらをずうっと延ばしているようだった。「はあ、鹿等(シカダ)あ、すぐに来たもな。」と嘉十は咽喉(ノド)の中で、笑いながらつぶやいた。そしてからだをかがめて、そろりそろりと、そっちに近よって行きました。”と言うような内容なのである。宮沢賢治は明治と言うこの時代において、もっとも自然を愛してやまなかった人の一人で、植物や動物はもとより、自然の中に生息する全てのものを、人間と同じ一つの生き物として捉えていた人のように思えてならない。彼のペンで描き出された自然は、色彩感にあふれて、あくまでも雄大であり、その空気感はあるいは墨絵のように、あるいは水彩画のようにも見える。植物はそれぞれに美しく可憐で、全ての動物は愛らしく生き生きとしている。彼の東北訛りの中には純朴でひたむきな生き方が、そのまま現れているように思えてならないのである。

ウメバチソウは可憐な花を咲かせるため、山野草ファンにはかけがえのないものだが、育てるのは難しい。湿り気のある土壌を好むというのは、単に水遣りの回数を多くすればよいというのではなく、流れる地下水がほしいわけで、野におきたい花ではある。



いかにも清楚で可憐なウメバチソウの花。和名の由来は菅原道真や前田利家が用いた家紋に因む。梅と因縁の深い湯島天神を初めとする天神社もこの家紋である(長野県美ヶ原高原)。



ウメバチソウは陽当たりのよい湿地に好んで生える(長野県美ヶ原高原)。

[目次に戻る](#)